

マンジョーカやトウモロコシ、フェジョン豆、それにオレンジやマラクージャなどの果樹を栽培する中小地主支配の地、そしてその奥が乾燥地のセルタンsertãoで、ラティフンディオの牧場がえんえんと広がる一帯だ。ただ残念なことに、8月は真冬で雨期だったから、緑は多く、常襲早魃地というイメージとはおよそ遠いものだった。しかし、入口の標識からはるかかなたにみえる牧場主の豪華な大邸宅と、農園労働者のモカンボ（掘っ立て小屋）との対照は鮮かであった。

ただ、ジュリアンの描くカンパーンの実態は、とてもこのような巡検でつかみとれるものではない。しかも、生産関係にはあまり関心を示さない地理学者の悪癖のためか、外国人に恥部をあらわにしたいくないという慮りのためか、そのような本質に立ちいっての案内者たちの説明はまったくなかった。

第2日の巡検は、アラカジュ以前の州都、ブラジルで4番目に古く、1590年に開かれたというサン・クリストヴァンをはじめとするメタ地区の古都めぐりだった。イベリアの田舎町そのものの風情をみせるそれらの町の一つ、ラランジェイラスには「アフロ・ブラジル博物館」があり、植民初期からの黒人関係の資料が数多く陳列されていた。なかでも、さる一室の壁にかけられた二枚の古い絵画が私の注意をひいた。先頭に立つ貴婦人的な黒人女性に従った女性たちが、それぞれに西アフリカの楽器を手をしているのだ。鍵盤の下にヒョ

ウタンのつけられたパラフォン（木琴）など、もしこの絵がノルデスチでの往時の状況を描いたものだとすると、パラフォンから中南米のマリンバへの伝播の疑点を解明する強力な証拠となるにちがいない。

サン・クリストヴァンでは、広場に面した小さなレコード店をのぞいてみた。うっすらと埃をかぶって、パラパラと並べられているレコードの多くがルイス・ゴンザーガのものだった。日本では往年の“バイヨンの王様”ぐらいにしか思われていない、ジュリアンと同じペルンブコ州出身のこの吟遊詩人は、その地元スタイルの衣裳とともに、今でもノルデスチはもとより、ブラジル全土で広く民衆に親しまれている存在だ。もちろん、私もその店でゴンザーガを3枚ほど、それも800クルゼイロ（約800円）で、いぶかりながら買った。というのは、大都市のレコード店では1枚1,500クルゼイロが定価だからだ。中古盤でもなさそうだし、と考ているうちに、ハタと思いついた。これは昨年の仕入れ値そのままなんだな、と。ブラジルのインフレはこの1年で約2倍というすさまじさで、このお買得品はまさにそのあかしだったのである。

アラカジュを出て、リオの本会議に向う日の朝、宿舎グラント・ホテルのロビーに流れていたのは、奇しくもゴンザーガの「ふるさとセルタンの月」だった。

（明治大学）

## 私の地理学事始め

河 辺 宏

今から35年前のことです。大阪府吹田市で生まれ育った私が、生まれてはじめて東京に来たのは、季節は12月。住んだのが杉並区高井戸で、今とは違って、畑が沢山ありました。毎朝手ぬぐいが凍って、棒のようになっていました。生まれてはじめての経験です。東京は寒いところだというのが当時の印象です。学校へは10分程度の道を歩いて

通いましたが、学校までの道は霜柱が融けてぐちゃぐちゃとなっていました。勿論舗装などしてありません。自転車ではとても通えません。タイヤに泥がくっついて動けなくなってしまうからです。

学校の運動場も昼間はぐちゃぐちゃでした。ぐちゃぐちゃな道や運動場などというものは大阪にはありません。東京とは何とひどい所だろうと思

ったものでした。

3月(だったと思いますが、2月かも知れませんが)に相模湖まで遊びに行ったときに感じたことは今でも覚えています。吉祥寺で乗り換えた中央線の電車の窓から見た、「武蔵野」の印象です。

私の生まれ育った大阪の郊外や、終戦直前から東京に来るまで住んでいた愛知県の豊橋市の郊外では、畑には冬でも何か植えられていて、緑がいっぱいでした。雑木林にも緑の葉がついていました。郊外の農家には白壁が使われていて、あかるいたたずまいでした。土の色も白っぽいものでした。要するに冬でもあかるく、緑に満ちていたように思います。

ところが東京の西郊——多分武蔵境か小金井あたりでのことだと思います——は、なにも生えていない(ということは緑の全くない)黒っぽい畑と、これも黒っぽい雑木林ばかりの、いやにだだっ広い、人のあまり住んでいないところのように私には思えました。だだっ広いというのは、近くに山が見えないためにそのように感じたものだと思います。なにしろ生駒山と千里丘陵を毎日ながめていたのですから。また防風林に囲まれた農家は当時の私には雑木林の一部としか見えなかったものと思います。なにしろ、白壁がありませんから。

とにかく、私が東京へ住むようになって2~3ヶ月過ぎた後に持った東京の印象は、「暗く、未開なところ」というもので、大阪や豊橋の郊外と

のちがいにただ驚くばかりであったのです。なお、これはだいぶ後のことですが、家の前の畑で収穫されていた、ゴボウとニンジンがいやに細く、長いのに驚いたものでした。なにしろニンジンやゴボウは葉っぱを持ってエイと引き抜けば良いと思っていたのですから。東京のニンジンやゴボウはそれでは真中から切れてしまいます。

\* \* \*

あれから35年すぎた今考えてみると、当時私が受けた強い印象、東京と大阪の冬のちがいに驚いたということが、私が大学へ入って地理学へのめりこむようになった大きな要因であったのではないかと考えられます。

飯塚浩二先生が「地理学は、人類が自己の属するコミュニティの外に目をむけるようになって、自己の属するコミュニティとは異なるコミュニティが世の中には存在することに気付いた時に誕生した」という意味のことを言っておられますが、私の35年前の経験はまさにこれと同じだと思うからです。難しい言葉でいえば、地域性の存在に気付いたということです。地域性の存在に気付くというだけでは地理学者とは言えないのは言うまでもありませんが、地理学と何らかの関係を持つ者にとって、地理学の出発点である「地域性の存在」の認識は非常に重要なことだと思います。

(人口問題研究所)

## 冬のマレー半島

佐々木 博

1982年12月18日から30日までの13日間、シンガポール・マレーシアを旅行した。真冬の日本から平均気温 26.4°C のシンガポール=チャンギー空港に降り立つと、暑さと湿気で汗が吹き出してきた。11月半ばから1月3日の新学期まで現地の学校は学年末休暇で旅行者が多く、漸くつかまえたタクシーでマレーシア鉄道シンガポール駅へ着いたのが21時40分。22時発の夜行で大東亜戦争開戦

時日本軍が上陸し、軍総司令部として使ったレンガ造りの「香港上海銀行」のあるタイ国境に近いコタパルへ行こうとの計画は、頓座。発車20分前というのに駅の切符売場はシャッターが下り、改札口にインド人が1人、「もう今日は満員、立っていかねばならない、明日だ、明日だ」。1日6本の列車しか発車しないダイヤにもびっくり。